

【紹 介】

釜 谷

——鎮魂のため——

矢 口 以 文

## 紹介

## 釜谷

## ——鎮魂のため——

矢口以文

二〇一一年三月一日の東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県石巻市の大川小学校は私の記憶によれば、かつては桃生郡河北町の釜谷(カマヤ)小学校と呼ばれていた。一九四〇年代だ。釜谷っておかしな名前だな、いつも思っていた。後に私は仙台のキリスト教系の大学で学び、そこを卒業してから北海道に住むようになったが、ある時「北海道駅名の起源」という小冊子を見つけた。それに釜谷は「盤のごとき大きな岩」を意味するアイヌ語、と書いてあった。道南の江差の近くに釜谷という名の町がある、ということも分かった。(釜谷という苗字があることも分かった)。もし本当にそれがアイヌ語だとしたら、今は石巻市になっているこの釜谷とその付近に、かつてアイヌの人々が住んでいたのかもしれない。

釜谷には僧侶の祖父が住んでいて、私は子供の頃からしばしばそこを訪れた。私は石巻の市外にある釜(これも不思議な名前である)という所に生れたが、小学校一年の時、両親は石巻のすぐ近くにある矢本(今は東松島市)という町に引っ越した。そこから釜谷に行く時には先ず電車で石巻に行き、そこから船に乗って、北上川をさかのぼった。バスもあったが、いつもびっしり混んでいた。そのバスなら一時間とちょっとだったが、船では二時間以上もかかった。二つの船が出ていた。ひとつは亀岡丸で、もうひとつは石巻丸だった。子供たちを

連れてゆく時、母はいつもは石巻丸に乗った。亀岡丸よりも少し図体が大きくて、船足も遅かった。船に乗ると、母と妹はいつも一階の客室に入り、畳にゆったり腰をおろしたが、兄と私は客室の上の屋根に登り、そこで脚を伸ばし、両岸の景色を楽しんだものだ。雑木林の山が広がっていて、いくら眺めていても飽きることはなかった。

船は一時間前後で飯野川(今は飯野)という小さな船着き場につくのだが、そこでは大福餅売りのおじさんが「もちー、もちー」と声をあげて船に乗りこんでくるのだった。頬が抜けそうにうまかった。北上川はそこで二つに分かれていた。左の川に行くと、平泉や宮沢賢治の名付けたイギリス海岸の方に行くのだが、そちらには行かず船は右の方に舵を切った。そこはもう北上川ではなく、追波川(今は又北上川になった)という名前の大きな川になるのだが、船はその川の横に沿って流れる運河を辿った。幅の狭い運河の両岸に船の立てる波が押し寄せて跳ね返るのを眺めて楽しんだものだ。

やがてその運河を出ると、広くて流れの急な北上川にまた出るのであるが、間もなく横川についた。川に突き出た小さな石垣が船着き場だった。この村では叔父が僧侶をしていた。祥雲寺という名の禅宗の寺だった。その叔父は私の母の妹と結婚して、矢口の姓を名乗っていた。そのいとこ達とはよく遊んだものだ。横川から更に三、四〇分ほど船

に乗っていると釜谷だった。川に突き出た石垣の船着き場で、係の男性が船から放られた綱を受取って岩の棒にかけ、引っ張って岩壁に船を引き寄せた。

船を降りて石垣の階段を登り、堤防に立つと、川の向かい側に橋浦の村が見えた。当時釜谷と橋浦をつなぐ新北上大橋はなかった。堤防を少し村の方に下ると橋があつて、そこから下を見ると富士川と呼ばれる細い急な川が渦巻いて流れていた。橋を渡って右側は小高い坂になっていて、その頂付近に「馬頭観音」の文字が彫られた大きな石盤が立っていた。左側はなだらかな坂で、そこを下ると、直ぐに村だった。道路の左側には屋根に石がいくつか置いてある家が数軒並んでいた。右側には武山旅館があり、その横の小さな空き地はバスの停留所になっていた。釜谷石巻間のバスがそこを発着場にしていた。そこから数分歩くと道路の右手に小学校があり、その隣には役場があつた。母の弟が僧侶の修行をしながら、そこに勤めていた。役場のすぐ後ろの山沿いに細い道があつた。それに沿ってちよろちよろの流れを眺めながら数分歩くと、祖父の寺が山のふもとにあつた。木々に囲まれていた。曹洞宗の寺で、観音寺といった。二〇〇年ほど前には侍屋敷だったらしい。一一世紀に八幡太郎義家が東北地方の豪族を攻めて戦った時、兜の飾りを失ったらしい。徳川時代にその飾りを村人が見つけ、その場所に寺が作られたということらしかったが、真偽のほどは分からない。祖父は何代目の僧侶だったのかも分からない。名前は義仙だった。これは僧侶としての名前で、もともとの名前は知らない。

細い近道ではなく、村道を歩くなら、小学校から十分足らずで村はずれになり、そこから右手を見ると、木々に囲まれた寺の山門が見えた。道路と山門との間に田んぼが十枚ほどあつた。山門は寺の正面であり、その入り口の左側には人間ほどの大きさの観音像が座っていた。

乾いた蚕の球がその周りにちらばっていた。境内の桜の木々の下は石畳で、寺の正面を開けて本堂に入ると、大きな観音像が坐っていて、入って来るものを静かな顔で、優しげに見下ろしていた。観音像の前には太鼓と鐘が置いてあつた。私はそこに座り、観音を見上げながら、太鼓をたたき、鐘を鳴らし、祖父の声をまねて唸ったりもした。本堂の右側には大きな地獄絵が張ってあり、眺める者を恐怖に陥れた。その本堂の右手に短い階段でつながった住宅があつた。その住宅にかぎが掛けられていることはなかった。留守の時でも自由に入れた。大きな家だったが、山に遮られて、日あたりは良くなかった。寺の庭には鶏の神々が祀られた小さな神社があつた。八幡太郎義家と書かれた小さな石碑もあつた。山門の前には小さな池があつて、祖母は時々そこで米をといていた。その池の横には小さな社があつた。

祖父の家に滞在している時にはいつも裏山の小道を少しばかり登り、寺の屋根を見下ろし、村を眺め、それから村のうしろの堤防を眺めたものだ。裏山と寺の庭との間に境界線はなかった。裏山に住むものたちは自由に寺の本堂や家や庭に入ってきた。特に蛇たちがそうだった。蛇が鶏小屋に忍び込んで、卵を呑みこんで腹を膨らして、悠々と這って出てゆくのを見たことがある。鶏たちが大騒ぎをしていた。飼い猫が野兎をくわえて家に入って来たのを見たこともある。次の詩は「青大将」である。

夜が更けてきても 祖母は針仕事に夢中だった

「おばあちゃん もう寝るよ」というと

祖母は「ああ お前の布団はね

ほら うしろの押入れに入っているよ

一番上の布団がそうだよ」

押入れを開け 背伸びして  
布団を取りだそうとしたら

大きな蛇がばさっと

飛び下りてきて 畳を大慌てで横切り

猫用の障子の穴から 素早く姿を消した

祖母は針仕事を止め 声を荒らげ

「またお前か！押し入れの布団で寝ては

駄目だって 何回も言っているのに

まだ分かんないのか！」と叫んだ

障子の穴から 裏山の風が すう と入ってきた

本殿での夜の読経を終えたばかりの祖父が

丁度戻ってきて 祖母に

「蛇も神様から来ているんだよ」と ぼつり小声で言った 僕は

蛇の寝ていた布団を敷いて それにくるまった

二〇一一年の三月一日、大川小学校が大津波に襲われて七四人の子供たちが犠牲になったことを聞いた時、何故裏山に逃げなかつたのか、最初に頭に浮かんだことだった。そうすればほとんどが助かつたかもしれない、と思った。生徒たちは「馬頭観音」の石盤の立っている高い所を目指していたようだが、小学校の裏山の方がどこよりも安全だったと思う。私がいとも登った寺の裏山も中腹近くまでは津波に襲われたようだった。僧侶の従兄弟が寺の山門近くにいた時に津波が襲ってきたので、慌てて車から飛び出し、ぬれ鼠になりながら細い山道を必死に這いあがって辛うじて助かったということだった。やつ

と頂上までたどり着き、山の向かい側の村に下り、知人の家に泊めてもらい、三日後に横川の従兄弟の寺にたどり着いたのだ。幸せなことにその横川は全く被害に遭わなかつた。その従兄弟の母親、即ち私の叔母は介護付きの老人ホームで介護を受けていたが、ベッドごと流されて、数日間行方が不明だった、と聞いている。

祖父たちは何年間釜谷に住んでいたのかは分からない。三〇年ほどだったろうか。子供は三人だった。長女の母もその妹も釜谷の小学校で、即ち津波に襲われた大川小学校の前身で学んだ。僧侶の娘だった母がどうして東京に行つて、キリスト教系の聖路加看護学校で学んだのか。関東大震災についてはいろいろ話してくれたが、看護学校に行つた動機については、聞かないうちに亡くなってしまった。祖父は山形県出身で、伝え聞く所によると家族を連れて故郷の余目（アマルメ）からやつてきた。祖父の先祖やその兄や親せきは農作物を作っていたようだ。地主の二男だったが、ある時どういふわけか僧侶になることに決め、数年の修業を経て、本山から認められ、釜谷の観音寺に赴任したのだ。子供たちを連れ、ほとんどの道のりを歩いてやつてきた、と聞いている。祖母は酒田の出身で、神主の娘だったようだ。

母は看護学校を出た後、看護婦として石巻の病院で働いていた時、父と見合い結婚をした。父は古川源一という名前だったが、将来は僧侶になりたいという思いを持っていたようで、矢口の姓を名乗るようになった。その父は敗戦の一年前に召集されたが、病身のために兵隊になれないと判断されて帰され、間もなく病気で亡くなった。父の生まれ育つた所は矢本町の大曲浜という太平洋の岸辺にある集落だったが、そこも津波にほとんどの家が呑みこまれた。あとで訪れてみたら父の実家も無くなつていて、そのすぐ傍に大型の漁船が一隻横たわつていた。

釜谷は小さな農業の村だった。その周りにも同じような農業の村々が散らばっていた。近隣には寺が数軒あったが、宗派が違っても僧侶たちは助け合っていたようだ。祖父が檀家まわりをしていた時、私はその小僧として首に小さな袋をぶら下げて、一緒に回ったことがある。祖父が訪問先の玄関の前で念仏を唱えるとき、そこのおじさんかおばさんが顔を出し、丁寧に頭を下げて、小皿に小銭か米をのせて、私の首にかけていた小さな袋に入れてくれた。どこの家でも、表札の横に祖父の書いた魔よけの文字が張ってあった。

祖父は行く先々でしばしば招き入れられ、濁り酒をひそかに御馳走になるのが好きだったようだ。その間、私はゆっくり外の景色を楽しんだ。小鳥の姿を追いかけたり、蟬を捕まえたり、小川に足を入れたりした。祖父と一緒に一日中歩きまわると、私の脚は棒になり、歩けなくなった。暮れ方にやっと寺に帰るのだが、祖母は桶に湯を入れて、丹念に脚をもみほぐしてくれた。

戦争中祖父はどんな思いで過ごしていたのだろうか。国家神道が最も華やかな時代だった。軍部が国家の実権を握り、戦争を始め、戦争を続けた。村人たちの多くも軍隊に召集され、戦死する者も少なくなかった。ある時石巻から釜谷まで、船が一艘、夫や子供を軍隊に取られた人たちの貸し切りになった。観音寺で祖父に拜んでもらったら、敵の弾に当たらない、という噂が飛びかかったようだ。祖父の長男、即ち私の叔父も召集され、千島列島のどこかで軍隊生活を送った。私たちが住んでいた矢本の町には海軍の飛行場があったので、敗戦近くには毎日のように米軍の空襲を受けたが、釜谷付近は空襲を免れた。

釜谷には井戸がふたつしかなかったが、そのひとつが観音寺の境内にあった。村の娘たちが朝と夕べに水汲みにやっていた。深い井戸の中に釣瓶をバシヤンと落として汲み上げ、木の桶ふたつを水で一杯に

し、天秤の両側に吊り下げて肩にかつぎ、田んぼの中の小道を巧みに操ってゆらゆら歩くのだった。昔からの習慣とのことだった。暮れ方にそのようすをいつまでも眺めていると、やがて祖父の突く寺の鐘がゴーンゴーンと村中に響き渡った。

#### 村の井戸

村の数少ない井戸の一つが

祖父の寺の境内にあった

子供の頃 その水は生きていた

山の頂から岩盤を伝わって

そこに集まり ゆつたり泳いでいた

小さなまるい底には空が浮かんでいた

声を小石のように落とすと

蝶のように飛び上がってきた

村の娘たちが朝晩 山のおもとのこの寺まで

水汲みにやっていた

木の桶ふたつに水をたつぶり入れ

天秤でかついで

寺から家までの長い細い農道を

桶を巧みに操って戻り

喉を乾かしている水甕にしゃあと

入れると 水は一瞬喜んで飛び上がった

―津波の被害見舞いに祖父の寺を訪れ  
ついでにその水を ほんの少し  
のどに流し込みたかったが

井戸も 境内の桜の木々も その後ろの

寺も消えてなくなっていた

水汲みにやってきた娘たちの家も消え

小学校は瓦礫になり 村のあった所には

巨大な沈黙がひとつ じつとうずくまっていた

### 釜谷

くにちゃんの家はこの辺で

さくちゃんの家はあの辺だった

五郎ちゃんの家はそっちの方だったと

思いだしながら歩いた

このあたりで かくれんぼして

さくちゃんに見つかって大笑いしたことを

思いだしながら 家が全くなかった町の

形のなくなった道路をたどると 直ぐに

瓦解した小学校に着いた

瓦礫になった入り口に置かれた献花台には

七十四人の子供たちのために

花束があげられ 線香がたかれ

その前で 寺も檀家もみんな

失ってしまった僧侶の徒兄弟が

呻くような声で読経を上げ その周りで

みんなが手を合わせていた

明治時代に母たちが通った学校だ

そこから直ぐの裏山に逃げたら

助かった筈だという声が心の中で渦巻いたが

私もその教師だったら 矢張り

同じように決めたかも と

心を重くしながら 瓦礫になった校舎の周りに

視線を向けると すぐ近くに海の水が

まだ這い回っていて

長い脚の水鳥たちがゆっくり

歩き回り 海の魚たちを呑みこんでいた

呆然としている私の足元に

風がゆったり舞い降りてきた

北上川が海に注ぐ所に長面という町がある。子供の頃、母に連れられてその浜に海水浴に行ったことがある。その町にはなだらかな山に囲まれた湖のような内海がある。

石巻市長面ながつら

—北上川が追波湾に注ぐ流域の小さな町—

やつと騒ぎの収まった水の中に

家が十数軒 腰までつかっていた

その中の一軒が いとこのもので 戸も

窓もはぎ取られ 奥の間まで見えていた

居間ではテーブルがひっくり返っていた

いとこが孫たちと一緒にテレビの前で

団欒を楽しんでいる写真を送ってくれたことがある

「退職したら 長面に引退したい」と書いたたら

釜谷

「ゆったり余生を楽しむには最高のところ

湾は湖のようだし 向かいのなだらかな山から

松林が穏やかな風を

送ってくれるよ」と返事を送ってきてくれた

子供の頃 母が海水浴に連れて行ってくれた海辺も

すぐ近くにある筈だと思ひ出しながら

いとこの家を眺め続けていたら 黒い背びれの

たくましいボラが数尾 窓から悠々出入りしていた

自然災害を古代の人たちはどう捉えていたのだろうか。聖書の世界の人々はどう解釈していたのだろうか。創世記の六章から九章にかけてノアの洪水の話が出ている。神はノアの家族を除いて人類を滅亡さ

せてしまう。この世は墮落して不法に満ちていたら罰した、と書かれている。しかし洪水であらゆるものが滅亡した後、このようなことはもうしない、と神は言った、とも書かれている。それで降ノアの洪水のような災害は聖書には出てこない。しかし聖書の外の世界にも洪水の物語はある。自然の災害は善い神と悪い神との戦いに関わっている、とする立場が多いようだ。私たちはどう捉えたら良いのだろうか。創世記の一章には神の創造が書かれている。空間も時間も神に作られたと聖書の世界の人々は信じた。海や川も当然神に作られ、それぞれが自分の領域を守るように定められた。しかしその境はきつちりしたものではなく、かなり余裕を持っていたとも解釈できる。そうならば罰ではない洪水や地震もあるという解釈が成り立つだろう。

二〇一八年二月二四日に大川小学校の閉校式が行われた。小学生の数が激減したし、釜谷はもう人の住める所ではなくなった。祖父は私が小学生の頃に亡くなったが、この釜谷を思う時には祖父を思い出ししてしまう。問いかけて、聞きたいこともあるし、聞いてもらいたいことも少なくない。議論したいこともある。

## 祖父への質問

無口で優しくあったあなたは曹洞宗の僧侶で 生前は

釜谷観音寺で住職を務めていました 私は今

あなたが亡くなった時の年齢を越してしまいましたが

前から聞いておきたかったことがひとつあります それは

日本が戦争をした時 なぜ反対しなかったのかということですが

若者たちが召集され 戦地に赴かされた時

戦って殺すことは仏教の殺生戒を

破ることになるのだと何故教えなかったのでしょうか

国のために戦って死んで 靖国に祀られることの方が  
名譽な事だと説かなかつたとは思いますが

国家の「敵を殺せ」の命令に従う方が

仏教の信仰を守ることよりも大事だと思つたのでしょうか

私はあなたの二人の孫たちとは違つて僧侶にはならず

敵は殺さずに愛しなさいと教えるイエス・キリストの弟子になり

国家教会ではない ある小さな平和教会のメンバーとして

イエスの教えを曲りなりにも生きようと努めています

積尊の教えに生きたあなたは このことを

どう思われるでしょうか

山のおもとにあつた観音寺は二〇一一年三月一日

大津波に呑みこまれてしまいました その時に

百年ほど前に母が学んだ大川小学校の七四人の児童たちは

逃げる途中で一挙に呑みこまれてしまいました

あなたが生前に訪問して経を上げていた檀家も

ほとんどが呑みこまれてしまいました

今 小学校の残骸の前に人々が集まり手を合わせます

そこで尼僧として経を唱えているのがあなたのひ孫です

寺のあつた所には仏像とマリアの像が立っています

あなたがここに生きていた事を証しする物は全くなり

あなたを記憶する村人も もうほとんどいません

わたしの記憶からも やがて消えさるでしょう しかしその前に  
この問いを是非あなたにして 話し合つてみたかった